

令和元年度第1回企画編集部会議事録

日 時：令和元年5月9日（木）10:28～12:12

場 所：赤れんが庁舎1階 文書館打合せ室

参加者：桑原編集長、坂下副編集長、平野委員、谷本委員、山崎委員、奥田委員、横井委員、道史編さん室（蘆原、中谷、伊藤）

1 開 会

企画編集部会長（編集長）挨拶

2 議事

（1）各（小）部会の進捗状況

ア．概説部会

イ．政治・行政部会

ウ．産業・経済部会

エ．教育小部会

オ．社会・文化小部会

（2）道史編さん計画（案）について

ア．現代史の対象時期について

イ．「道史研究レポート」（仮称）について

（3）その他

ア．道新記事データ（第1期分）の提供について

イ．追加委員について

ウ．その他

3 閉 会

1 開 会

○靄原室長

- ・皆さんおそろいですので、定刻より少し早いですが始めさせていただきます。
- ・本日は、小内先生が急な用務が入り欠席となっているが、本日の議案内容について説明しご意見を伺ってきているので、後ほど紹介させていただく。それでは、桑原先生、お願いします。

○桑原編集長

- ・ただいまから令和元年度第1回企画編集部会を開きます。今日の議事は、お手元の書類にありますとおり、
 - 1 各（小）部会の進捗状況報告について
 - 2 道史編さん計画案について
 - 3 その他となっています。

2 議事

(1) 各（小）部会の進捗状況

○桑原編集長

- ・最初に各部会、小部会の進捗状況についてご報告をお願いします。

ア. 概説部会

○桑原編集長

- ・資料1をご覧ください。概説部会は平成30年から31年にかけて計4回開催した。
- ・第1回目は、当時のメンバーが3人しかいなかったため、その体制で概説を検討するのは無理があるのではないかということになり、委員補充の話があった。
- ・第2回目では委員を3人増やし、6人体制で部会を開いた。新しく委員が加わったことから、これまでの経過を説明したところ、新しく加わった委員からの質問で、なぜ概説編に対応する通史編がないのかという点に議論が集中し、概説の体裁についての検討は時間切れで十分できなかった。
- ・第3回目は、概説の編集方針と内容について検討した結果、編集方針としては、ビジュアル型よりも記述中心の通史型とすることを確認した。また、概説部会の中に、前近代史小部会と近現代史小部会という2つの小部会を置くこととした。さらに委員の分担についても議論し、全体に高齢男性の委員が多いので若手研究者や女性の委員を追加してはどうかということになった。
- ・第4回目は今年の4月4日に開催し、概説の編集方針について継続審議をした結果、道史の概説という認識からの独立性を強調するため、書名を『北海道史クロニクル』とすること、分量は全体で上・下2巻各400頁程度を目途に編集すること、記述のレベルは一般道民にも容易に理解できるレベルとすること、などを確認した。
- ・以上が4回の概説部会の検討結果ですが、平野委員と谷本委員から補足することはありませんか。

○平野委員、谷本委員

- ・ありません。
 - 坂下副編集長
- ・2巻本にされるのか。
 - 桑原編集長
- ・1巻では足りないという意見が出て、事務局とも相談し、2巻本にするようにできないかということは今検討してもらっている。
 - 坂下副編集長
- ・前近代と近現代ということですね。
 - 桑原編集長
- ・はい。下巻の方は近代と現代に分かれますが、現代の部分については本体の方の通史編に携わる先生方に、頁数はあまりないが、執筆協力をお願いしたい。
 - 奥田委員
- ・誌名にクロニクルという横文字を使ったことについて、何か議論の経過はあるか。道民に馴染みづらいのではという心配を感じる。
 - 桑原編集長
- ・北海道史概説とか、新しい北海道史、など6つくらい案を考えたが、どうも既成の北海道の歴史本のイメージに引っ張られやすいということになって、北海道現代史の中の概説編ではあるけれども、そこから半分くらい独立したイメージを強調しようということで、思い切ってこういう名前にした。その代わり内容もそれにふさわしい内容にしなければならない。名前がハイカラなだけに、中身が旧態依然としていてはどうにもならないので、概説部会の委員の責任は重い。
 - 横井委員
- ・新しく加わられた3人はどういう方か。
 - 桑原編集長
- ・新しく加わった方々は道史協(北海道史研究協議会)のメンバーでもある。道史協は一昨年度に、前近代の部分をもっと重視して編さんすべきとの意見書を出した団体。その団体の意見が半分反映されたご意見を主張されて、なぜ編さん体制が現代史中心になったかということの説明に時間を費やした。10年しか編さんする期間がないこと、前近代までをトータルに編さんするには20年はかかり、それは時間的にも予算的にも無理だということに理解してもらった。

イ. 政治・行政部会

- 山崎委員
- ・資料2をご覧ください。一番大きいのは、具体的な資料収集及び執筆に先駆けて、関係者へのインタビューを断続的に行ったこと。横路・堀両元知事をはじめ副知事経験者、部長級の方々11人、のべ12回のインタビューを行った。両元知事に関しては、テープ起こしをして、ご本人の校閲を経て、資料編に掲載する予定。それ以外の副知事以下の方々に関しては、完全オフレコということでお話を聞かせていただいた。インタビュー準備に伴う各種資料調査も、編さん室スタッフの力を借りながら行った。
- ・春休みに4回、文書館書庫の中を調べ、必要なものを複写した。
- ・この部会は私の他に北海道大学法学部前田亮介准教授が今年の夏に留学から帰ってか

ら、本格的に作業に加わっていただく予定。その前田先生の道史編さんへの御協力を期待させるものとして、北海道開発局の「開発こうほう」5月号に、開発協会の助成金で研究された研究成果として、田中敏文元知事の時代が掲載されている。驚いたのは、田中元知事のご遺族のところへ行き、元知事がしたためていたノートを見せてもらい、それを写真に撮影したものが掲載されていることで、あの時代をこうした方法で掘り起こすことに、今日的な新しい研究の方向性・余地を感じる。たいへん興味深い論考なので、是非ご覧いただきたい。

○桑原編集長

- ・留学前にまとめられたものですか。ご遺族は東京ですか。

○山崎委員

- ・はい。平成29年度の研究成果の報告。ご遺族は帯広と聞いている。

○桑原編集長

- ・事務局は後日、各先生方に提供してほしい。
- ・4月に退任された前知事にインタビューされる予定はありますか。

○山崎委員

- ・研究体制その他に余力があれば面白いが、今回の編さんの対象ではないので、予定はない。ただ、次に北海道史をいつつくるかはわからないが、その時にインタビューが可能かどうかは微妙であり、退任直後の記憶の鮮明な時にお伺いすることも大事かもしれない。

ウ. 産業・経済部会

○坂下副編集長

- ・産業・経済部会は、資料編を最初に出すことから、先頭を切って頑張らなければいけない。最初は毎月1回くらい部会を開こうとしたが、人数も結構いて日程調整も難しく、結局4回であった。
- ・1回目は、全体の調整が主で、各委員からそれぞれの枠組みを出し、例えば、加工業は原料の方でみる、農産加工なら農業でみるなど、持ち分の境い目を調整した。情報産業の関係は、2000年で区切るの厳しいという意見があった。
- ・奥田委員からは、だいたいの目安として、大項目10、中項目25という提案があった。中項目1つ当たりの資料は平均34頁、中項目別の解説は平均6頁ずつが目安となる。
- ・他の県史を参考に、スタイルとしては、なるべく1次資料で面白いものを集めその解説もすることとした。どういう形式にするかは未定だが、資料の中に統計も入れる。それぞれの産業別に年表は必要であり、基本は事務局につくってもらい、つくってもらったものを最終調整する。
- ・2回目は、現代史の中の資料編の先例やイメージが乏しいことから、私ならこうつくるといって報告を私から行った。B4、1枚で横に時期区分をし、縦に大項目・中項目を取り、その中にまんべんなく資料を入れる仕組みとし、その中に手元にある資料を配置した見本で提示した。加えて、戦前から含めて北海道農業史について私の考えを説明した。
- ・3回目については、商業部門の取り組みの報告、特に商工会議所の資料の話を含めて、満園委員から発表していただいた。また奥田委員から、資料の取扱いについて、例え

ば統計については基礎的なものを持ち寄りながらつくろうとか、産業関連の年表を事務局と調整しながら入れ込むという話をしていた。

- ・ 4回目は、青木委員から、新北海道史以降の炭鉱政策の概要の報告をいただいた。
- ・ 資料調査については、資料3の下のとおり、それぞれの方が動き始めている。
- ・ 明日、5回目の部会を開くが、とりあえず全員1回発表してもらおうつもりで、毎月1回を目標に開催し、その中で全体のイメージ作りを進めていく。

○横井委員

- ・ 大項目数、中項目数や項目当たりの頁数等の資料を、参考にさせていただきたい。
(事務局から配布)

エ. 教育小部会

○横井委員

- ・ 2回しか開催しておらず、スピードを上げて進めるところまで至っていない。昨年
の前半に担当委員が確定し、8月7日に初めて全員が集まった。そこで内容構成と担当
を大まかに私から提示し、数ヶ月内に各自の分野の詳細な内容・項目を作成するよう
依頼した。
- ・ 2回目は3月に集まり、重複するところ等、担当分野を調整した。
- ・ 社会・文化と教育とで1巻であり、どれくらいの頁数が我々に与えられるのか、各委
員、各項目にどれくらいの頁数が配分されるのか、はっきりしないと進まないという
ことで、事務局に他県史の例を示してもらった。それを元に、今後私の方で早急に振
り分けをつくり、各委員に提示して調整しなければならない。また次回は小川委員に
来てもらい、アイヌの部分をもどのように資料編に入れるか、我々が対応すべき部分
はどこかを聞く予定。
- ・ 追加委員として、教育大函館校の坂本紀子先生に参加していただくこととした。

オ. 社会・文化小部会

○轟原室長

- ・ 小内先生に代わって報告します。部会の開催は、第1回目が8月16日、第2回目が3
月13日。
- ・ 第1回目は、企画編集部会で、資料編は山口県史を参考にするとの方針が出たことを
受け、小内先生からたたき台として、構成項目毎に各委員が担当する頁数の目安と、
資料点数の目安が提示され、質疑応答があった。それを基本にスタートすることとし、
進め方としては、3ヶ月に1度、お互いの資料調査結果を共有することを目的に、各
委員がどんな資料を集めたか、細かい資料リストを事務局でつくり、各委員に配布す
ることとした。
- ・ 第2回の小部会は、11月末と2月末時点でまとめた資料リストを踏まえ、3月に開催
した。出席委員から、進捗状況、見えてきた課題、お互いの分野の調整等を報告し合
った。今後も3ヶ月に1回ずつ資料リストを事務局から送付する作業を繰り返し、9
月と3月に小部会を開催する予定。3月の小部会の後で、第一次掲載候補資料案を全
体としてつくる予定で進めている。
- ・ 調査実績としては、資料所蔵機関のほか、消費者運動や自然保護運動に係る団体

への調査や、日本医療新聞社への調査などがある。

○奥田室長

- ・共有資料リストを参考にさせていただきたい。

(事務局から配布)

○横井委員

- ・産業・経済部会の資料では、資料の部分が 850 頁、解説の部分が 150 頁ですね。

○坂下副編集長

- ・はい。中項目数 25 なので、解説は 6 頁ずつ。通史と資料の関係は、山口県史を参考にしながらやっていく。

○奥田委員

- ・社会・文化小部会の共有資料リストは事務局でまとめているが、同じようなものを産業・経済部会で作ってもらうことは可能か。

○鶴原室長

- ・可能です。

○桑原編集長

- ・部会報告は以上で終わります。

(2) 道史編さん計画 (案) について

○桑原編集長

- ・次に議事の 2 番目、道史編さん計画 (案) に移ります。

ア. 現代史の対象時期について

○桑原編集長

- ・資料 7 をご覧ください。道史の資料編及び通史編の対象とする範囲は、これまで原則として 1945 年 8 月から始まり、主に 2000 年前後、厳密に言いますと、堀達也知事時代の 2 期 8 年が終了する 2003 年くらいまでを対象とし、その後を継承した高橋はるみ知事時代の 4 期 16 年間は取り上げないことになっている。これは、高橋道政の評価が定まっていないことにもよるし、また関連資料の公開も難しいという面もある。

- ・この部会では、従来の方針を堅持したいと思う。つまり、2000 年から 2003 年頃が下限であるという方針を、改めて確認したい。従来は 2000 年前後と言ってきたが、厳密に言うと堀知事の 2 期 8 年が終了する 2003 年くらいを下限にする。ただし通史を書く場合には、例えば山崎先生の部会は、その後の話も書かないといけないと思う。現実にスペースがあるかどうかは別として。

○山崎委員

- ・私も 2003 年を目途にやっているのですが、政策課題によってはその後に言及するものもあるが、基本はこの方針に従いやっていくつもり。

○桑原編集長

- ・坂下先生の部会は難しいですか。

○坂下副編集長

- ・2000 年くらいで止めるならば、情報産業など、特に最近急速に伸びている分野はそれほど分量にならないので、その項目を入れるか入れないかという話になる。担当者

は、もっと引き伸ばしたいという意向がある。

○桑原編集長

- ・多少のこぼこはあってもいいと思うが、2000年から2003年以降について新たな章を設けて書き込むということは控えて欲しい。

○坂下副編集長

- ・そういうことはない。

○桑原編集長

- ・言及することは仕方がないと思うので、若干の幅はあると思う。概ね2000年前後、2003年くらいを目途に下限とすることを確認したい。よろしいか。

○奥田委員

- ・産業の特殊性によっては、若干の幅は部会の中で話し合っ、やむを得ない場合は認めるということですね。

○桑原編集長

- ・それはあり得ると思う。

○横井委員

- ・終わりの時期をどうするかは教育小部会でも議論になっていた。90年代の中盤から構造改革が始まり、それが実際にいろいろな形で出てくるのが2000年代に入ってから。教育政策の変化がはっきりしてくるところなので、時期区分を3つくらいにすると、その時期の学校評価などの内容も入ってしまう。そこを入れると新しい時期に変化しているということが書きやすいので、入れたいという考えもあるが、その辺の時代の資料はネットなどで取れるので、資料編としては入れなくてもよい。通史としては、終わりの方で少しそういう内容を書きたいという要望がある。ここにあるように、通史の叙述の中で書きたいという感じ。

○桑原編集長

- ・触れることは差し支えない。

○横井委員

- ・資料はあまり取り上げないと思う。

○桑原編集長

- ・そのあたりは適切に判断してください。現代史の対象時期の問題はよろしいか。

(全員同意)

イ. 「道史研究レポート」(仮称)について

○桑原編集長

- ・次に資料8をご覧ください。

1963年から編さん事業が始まった『新北海道史』では、『新しい道史』という変形の機関誌が刊行されており、その直後に編さんを開始した松前町史編集室では、『松前藩と松前』という本格的な研究紀要を出した。それに影響を受けて、函館市、札幌市、旭川市などの各自治体が、独立の研究紀要を相次いで創刊した事例がある。これらの研究紀要は、地域史研究の発展だけではなく、北海道史全体の発展にも大いに寄与したことは明らか。この度の北海道史編さん事業においても、研究紀要に類するものを是非出して欲しいという要望が委員の間から寄せられており、その実現に向けて検討してきた。

- ・最初に印刷物の形態のものを考えたが、そのための予算措置は残念ながら認められておらず、事務局と協議した結果、デジタル版として「道史研究レポート」のようなものを不定期に刊行したいと考えている。
- ・その趣旨は、資料8の1に書いてあるとおり。掲載内容は、①論考、②資料紹介、③調査報告、④担当分野の構想に関すること、を想定している。執筆内容及び内容確認については、執筆者は原則として委員のみとし、一般の投稿は募集しない。委員は編さん期間内に少なくとも1編は執筆することを目標とするが、執筆時期や内容及び分量は任意とする。各部長あるいは小部会長の指定した専門委員が、あらかじめ提出原稿の内容確認を行う。掲載内容で資料の原本所蔵者等の承諾を必要とする場合には、事務局が手続きを行う。上記掲載内容のうち、①論考と②資料紹介を執筆した委員には、些少なから原稿料を支払う。掲載については、順次ホームページにテキスト形式で掲載していく。委員が道史で調査した内容を道史刊行前に研究論文や授業で取り上げる場合には、本レポートでの発表及び資料の原本所蔵者の同意を前提とする。編さん事業終了後の取り扱いについては、紙媒体での印刷刊行も含め、別途検討したい、以上です。
- ・最初、本格的な印刷物形式の紀要の創刊も考えたけれども、そういうものをつくるとなると、事務局の負担と経費の問題が出てくるので、とりあえず道史研究レポートのようなものを考えた。また編集委員会をつくることも考えたが、それを組織すると集まるのもたいへんなので、出された原稿は部会長が確認すれば順次掲載することとした。

○轟原室長

- ・小内先生にこれをご説明した時に、ご質問があった。「5その他(1)」の、「道史刊行前の研究論文や授業で取り上げるにあたってはまずここで発表した後で」、ということについて、実際に文書館や図書館で調査した資料のごく一部を講義などで紹介する場合も必要なのか、その境界線が曖昧という御指摘があった。
- ・事務局としてはそういう資料は念頭になく、団体とか個人のお宅に、道史の調査ですと調査させていただいた結果を、別の目的に使うというのは問題だろうということがあったので、この項目を案として置いた。
- ・かといって、図書館、文書館でものすごい長時間をかけて膨大な調査をして、コピー・カメラ撮影したものが、別に緻密な論文の中で出されるのはいかがか、その辺りのあやふやな部分も実際ある気がした。

○奥田委員

- ・論文又は論考等の1編が4千字となっているが、原稿用紙10枚、A4にすれば2頁半～3頁にしかない。

○轟原室長

- ・足りないですか。

○坂下副編集長

- ・普通は400字原稿用紙40枚が論文の基本。電子ジャーナルのようなものならば、様式をつくって、そこに目次と原文を入れて、いつ出したかをきちんと管理しておけば、字数制限の問題はないと思う。

○轟原室長

- ・印刷はしないので、長くてもかまわないが、原稿料の予算が足りなくなるかもしれない

い。

○奥田委員

- ・何字以上は原稿料を打ち切りとかにできないか。上限を4千字とされると論文にはならないので、書く気がなくなる。

○横井委員

- ・資料を載せる人がいれば4千字では全然足りない。

○桑原編集長

- ・では4万字程度にしますか。

○横井委員

- ・執筆料の予算はどれだけですか。

○靄原室長

- ・原稿用紙1枚当たり2,250円。10頁、5人の計10万円強で予算組みしている。打ち切りを許してもらえれば何枚でもよい。

○奥田委員

- ・ここに書かなくても、原稿料は4千字程度で打ち切りとすると周知すれば良いのではないか。

○坂下副編集長

- ・執筆頁数は常識の範囲にしてもらい、部会長が読んで認めれば良いのでは。

○桑原編集長

- ・編集委員会とか投稿規定をつくる必要はあるか。

○坂下副編集長

- ・電子ジャーナルの枠組みは、事務局で考えてもらいたい。タイトルも、「レポート」では軽めな感じがする。執筆要領もつくった方がよい。

○谷本委員

- ・道史研究レポートという頁をホームページにつくって、1号・2号、あるいは何年度といった区切りをつくらないのか。締め切りはどうするのか。

○靄原室長

- ・想定していたのは、号数があって、目次があって、リンクをクリックして見るという形式。年度毎の第1号という形を考えていて、できた時点で、そこへ入れることを考えている。

- ・5(2)は、道史編さん室のホームページに貼り付けても、編さんが終わったらホームページがなくなってしまい、置き場所がなくなることから。10年後の話なので今から確たるものを書くわけにはいかず、このような表現にした。

○坂下副編集長

- ・ある程度区切って第何号とした方が、1年経って正式なものになるというよりも、やりがいがある。

- ・そこに書いてある趣旨は、原著論文にはしないということで、そこに書いて責を果たした上で自分の論文で書くということになると思うので、ある程度区切って出した方がよい。

○平野委員

- ・僕らの性癖として、締め切りがないとなかなか書かないので、一応の締め切りはあつ

た方がよい。

○山崎委員

- そのような論考を一生懸命書くのも1つですが、北海道大学では北海道大学150年史編集ニュースというのが配られていて、谷本先生や横井先生はご覧になっていると思うが、いろいろな細かいトピックスを見開き1頁で平易に紹介していて、こんなことをやっていますという紹介になっている。こういうのでよければ私も書けると思うが、これから資料編で一生懸命書かなければいけないのに、それに加えて4万字の論考を2~3年後に1本書けというのは、正直たいへん。こういう軽めのもの、例えば資料編の解説の初歩段階のもので許してもらえたらありがたい。

○奥田委員

- それは、掲載内容の②③④のイメージですよ。1編の分量800字からですからそういうものもあってもよいし、4万字程度のものもあってもよいのではないかと。

○桑原編集長

- 書く形式は各自自由で結構です。名称はこれでよろしいですか。

○坂下副編集長

- メンバーの中で募集した方がよい。

○横井委員

- 「原著論文ではなく」というのはどういうイメージか。分野によって研究成果の見方が違う。

○坂下副編集長

- これを学会誌と同等にというのは、頑張ればなると思うが、紹介やPRするようなものと紀要的なものが一緒になっているものは、理系に入っているところでは問題外。

○横井委員

- 紀要に類するものと見られず、農学部では論文として認められないということか。書く人からすれば、論文であれば、ちゃんとした雑誌に載せたと評価されるようになっている方がよい。その上で、自分の分野で業績として出す時に、それぞれの判断でmisc(その他)に入れるのがいいと思う。

○桑原編集長

- では雑誌の名前をちゃんとした方がよいですか。

○坂下副編集長

- それもあります。分野によってOKのところと駄目のところがあると思う。

○奥田委員

- 横井先生のおっしゃる意味は、掲載内容の②③④ではなく①ですか。

○横井委員

- ③がどういうものかわからないが、主に①。何かいろいろと雑多なものを載せているだけよりも、論文を紀要に書いたということになれば、それでよい。編集委員会をつくる必要まではないと思うが。

○桑原編集長

- それは編集上の工夫をして、変なものにならないようにしたいと思う。

○坂下副編集長

- ホームページで進捗状況を出すというのはよいと思うが、ホームページ管理は1人が

専念しなければならないくらいたいへんなもの。それも一緒にしてしまった方が、事務局としてはいいのかなと思う。

- ・やはりタイトルが大事なので、「〇〇紀要」のようないいものを考えてほしい。電子ジャーナルでも国会図書館の番号を取ることは可能か。きちんとした手続きを取った方がよいのではないか。

○谷本委員

- ・そこは気になっていて、道博物館の紀要は ISSN（国際標準逐次刊行物番号）がついていますが、掲載論文には DOI（デジタルオブジェクト識別子）もついているのではないかと思います。これを学術刊行物にするのかどうかは、①がありますから。それから山崎先生のおっしゃった広報誌にするのか、①を含めた学術誌にするのを考える必要があると思う。

○桑原編集長

- ・今ここではすぐに出せないと思うので、雑誌の名前等については、後で意見を寄せていただくことにする。

○坂下副編集長

- ・性格付けみたいなものを、皆さんから聞いた方がよいのでは。仮置きで出すもので、本当の論文はよそに出すとした方がよいのか、それとも一発で出すのがいいのか、考え方はあると思う。

○桑原編集長

- ・事業としては2年目に入っているのですが、何らかの形で道史編さんがここまで進んでいますということを道民に知らせないといけないと思う。

○坂下副編集長

- ・中身が良ければ結果的に評価されて引用されるということだと思う。

○横井委員

- ・私の感覚では、ここに載せて別の所にも載せたら、同じものを載せたことになるのでそれは駄目だということになる。本に入れるのは別として、ここに載せたらここだけとなり、雑誌としてまた別のところで出すことにはなりにくい。総合していろいろ書き直すことはあるけれども。

- ・執筆者は委員のみになっているが、基本的に依頼はしないということか。何かの分野に詳しい人が外部にいて、書いて欲しいとか、紹介して欲しいとかあるのではないか。

○桑原編集長

- ・それはあるかもしれない。例えば、委員の中で本を出した場合に書評をお願いするという事はあり得る。

○坂下副編集長

- ・外部の人へ依頼することになれば編集委員会のようなものをつくり、部会長くらいが集まらなければならなければならないから、ややこしくなる。

○桑原編集長

- ・そこまですることは無理ですね。

○横井委員

- ・先ほど紹介されたいろいろなところで「～史研究」のようなものを出してきて、そこには執筆者以外の人も書いたりして、北海道史が発展してきたという流れがある。今

時点で、書く人のあてがあって言っているわけではないが。

○桑原編集長

- ・依頼原稿はあり得る。

○坂下副編集長

- ・特集を組んだりする中で、中には足りない部分を補充していただくということはある。うちの部会は、とにかく仕事をしてくれ、調べたことを発表してくれというのが基本。

○横井委員

- ・基本は委員に限るとしても、特別に道史を進めていく中で、縁があつたりした場合に頼むことはあるかもしれないと思う。

○桑原編集長

- ・その道は残しておきます。

○横井委員

- ・原則として、とはそういう意味だということですね。
- ・5（1）は、柔らかいイメージだということでしたが、「授業に取り上げるに当たっては」という文言がものすごく厳しい感じがする。

○桑原編集長

- ・授業という文言は必要か。

○靄原室長

- ・論文とセットでよく先生方に聞かれたので入れた。授業の場で資料を配布するというのはいかがかと思う。

○坂下副編集長

- ・著作権のことは確かに今うるさくなっているが、「公開する」というような言葉の方がよいのでは。

○奥田委員

- ・レポートでの発表と原本所蔵者の同意、とあるが、2つを共に行うのが前提ということか。どちらかが欠けても研究論文や授業で取り上げるのは避けて欲しいということか。

○靄原室長

- ・そういう意味です。

○横井委員

- ・特別に入手した資料はそうだと思うが、ごく普通に見られる資料もたくさんあるので、それを道史でもらったから一切使ってはいけないということにはならないと思うが、この文言ではそのようにも見える。その前の「調査した内容」の「内容」は何を指しているのか。自分の研究と道史が重なる人もいるわけで、それを厳密に区分できない場合もある。

○靄原室長

- ・例えば未公開の行政資料や、特別に入手した資料ということ。印刷物は基本的に問題ない。「内容」は「資料」ということばに置き換える。

○桑原編集長

- ・道史研究レポートのところは、雑誌名と投稿規定のようなものは、事務局と相談して

後で皆さんにご意見を伺うようにしますからそれでよろしいか。意見はその時に寄せてほしい。

○山崎委員

- ・いずれにせよ、性格付けをどうするかをきちんとしておかないと、走り始めてから事務局がたいへんになるのではないかと懸念される。北海道大学の編集ニュース程度でもそれなりにたいへんだと思うので、ある程度の運用の前例やモデルを持ちながら始めた方がよい。闇雲に始めてたいへんなことにならないよう、是非ご留意願います。

○桑原編集長

- ・道史本体の編集作業に差し支えがないようにしたい。

○坂下副編集長

- ・北大の編集ニュースの方が、企画が伴うからたいへん。電子ジャーナルの方がどんどん出してもらいたくだけ貼るだけだから楽だと思う。

○山崎委員

- ・そうであっても、形にするとなるとたいへんになることが懸念される。

○靄原室長

- ・実際に他の県史に聞いても、年に1回つくるのでも、本体をつくるのと同じくらいにとてみたいへんで、今から始めるならかなりの覚悟が必要だと言われた。

○桑原編集長

- ・茨城県史研究は長い期間出していましたね。

○靄原室長

- ・出していました。青森県史は途中でやめました。

○奥田委員

- ・それは紀要として出していましたか。雑誌番号、国会図書館のDOIは取っていましたか。

○靄原室長

- ・番号は確認していませんが、取っていると思います。それなりの厚みのある紀要タイプです。

○坂下副編集長

- ・電子ジャーナルの場合の番号は、調べてみないとわからない。

○桑原編集長

- ・何とか今年度中に第1号を創刊できるようにこれから頑張っていきたいと思うのでよろしくお願いします。道史研究レポートの件はこれで終了します。

- ・次に、道史編さん計画について事務局から説明して下さい。

○靄原室長

- ・道史の編さんにあたっては、道史編さん大綱しかないことから、この企画編集部会で、もう少し細かい道史編さん計画を取りまとめて、7月開催予定の道史編さん委員会に案として提出し、審議していただこうと考えている。これが第1の趣旨の部分。

- ・第2に、刊行の内容。現代史の部分は、誌名の案を『北海道現代史』としているが検討していただきたい。資料編は3巻で、刊行年度は資料編2が先だが、資料編順番としてはこのようにしたい。通史編については1巻または2巻という案しかできていな

かったが、2巻の案になっている。年次で区切り、終戦から高度経済成長期を1巻目、2巻目はそれ以降としている。

- ・概説の誌名については、先ほどの概説部会の報告のとおり『北海道史クロニクル』。部会で2巻ないと盛り込みきれないという意見があったので、上下2巻を同年度に出す案としている。年表の誌名は、『北海道史年表』。
- ・それぞれの形態、刊行部数は第2の2のとおり。資料編、通史編の刊行部数のうち、無償配布するのは、道内自治体及びその図書館、高校、大学、他県の図書館、道外の主要な大学、その他関係者で計1500部。有償は実費を払って配布する分で、資料編より通史編は少し多く積算している。
- ・概説と年表は、価格を抑えるため並製本。有償配布は一般の書店でたくさん買ってもらいたいので5000部。
- ・概説の無償分が少し多いのは、各市町村の教育委員会にも配布し、市町村内の小中学校に有償で買っていただく呼び水にするため。
- ・年表の頁数は、前回の年表に新しい時代を加え、また今までのものは文字が小さく読みづらかったので、A5判にして1000頁必要としている。
- ・第3の編さんの方針、第4の道民からの情報収集・道民への情報提供は、記載のとおり。
- ・第4(2)が、先ほどの道史研究レポートの件。
- ・第4(3)のデジタル公開については、去年の道史編さん委員会でも、デジタル化をどこまで考えているかという質問が出て見解が保留になっていたところ。とりあえず現代史の資料編・通史編はデジタルデータで、1～2年遅れるかもしれないが、公表することとしている。ただし、通史編の記述自体は問題ないが、掲載資料や貼り付ける写真について、原本所蔵者にデジタル公開の可否を確認し、了解を経た上で掲載する必要がある。PDF形式ではなく検索可能なテキスト形式で考えている。これについては、青森県史がつい最近から、収集資料をアップする事業を始めている。現代史の部分は、著作権等の問題があり、なかなか出しづらい状態があるようだ。

○桑原編集長

- ・誌名については、「北海道現代史」、概説を「北海道史クロニクル」、年表は「北海道史年表」としたいと思うが、よろしいか。

○坂下副編集長

- ・「北海道史年表」は前回も同じ名前でしたか。

○轟原室長

- ・「新北海道史年表」でした。

○桑原編集長

- ・「増補版」とかをつけることも考えたが、つけなくて、出典を明記するなど基本的に前の体裁を継承しつつ、前の誤りをただした上で昭和45年以降を付け足す方針。
- ・「北海道現代史」も正式名称に決まっていなかったですね。

○轟原室長

- ・はい。概説と年表を含めて3つに一体的な名前を付けるということもあり得るけれども、去年の委員会の中では、それがいつの時代を扱ったのか分かった方がいいというご意見もあったので、北海道の現代史であるとわかるような案になっている。

- 桑原編集長
- ・この部会ではこの案でいきたいと思います。よろしいですか。
- 横井委員
- ・第3の編さんの方針の1（7）のアイヌ史の部分は、各巻にこのように入れていくというイメージか。
- 桑原編集長
- ・概説部会でも小川委員に各項目へのご意見を伺う。
- 坂下副編集長
- ・全項目になるかは分かりませんが、産業・経済部会でも各項目にバラバラに入るイメージで、例えば農地改革の中のアイヌ給与地問題など。小川委員が部会で説明された話では、バラバラに入れるけれども分かるように索引をつくるとか工夫をした方がいいとのことだった。
- 横井委員
- ・教育小部会では、どういうふうに入れるのか、まとめておくのか、学校教育や社会教育、児童福祉、それぞれに関わるので、分けるとたいへんな気がする。
- 奥田委員
- ・産業・経済部会では、農業では確実に出てくるが、他の産業ではほとんど出てこないのではないか。
- 坂下副編集長
- ・沙流川の問題などでは出てくる。
- 桑原編集長
- ・農地改革のアイヌ給与地問題はどのようにするのか。
- 奥田委員
- ・これは戦後の農地解放のところで確実に取扱う。
- 坂下副編集長
- ・農業の関係でもウタリ対策事業がある。それらをどこまで入れられるか。
- 横井委員
- ・教育小部会は教育小部会で、小川委員に来てもらって、どういう形で入ってもらうかという話をそれぞれがすればいいということか。
- 桑原編集長
- ・そうです。小川委員は基本的にアイヌ教育史の専門家ですね。道史編さん計画はこれでよろしいか。
- 奥田委員
- ・デジタルデータはホームページで公開された段階で取扱い自由ということによろしいか。
- 靄原室長
- ・取扱い自由なものだけを公開する。
- 坂下副編集長
- ・これはどこに残すのか。
- 靄原室長
- ・道立図書館の北方資料室が運営している「北方資料デジタルアーカイブ」というサイ

トがあり、話をしたところたいへん歓迎してくれたので、そこに貼り付けることを考えている。

○山崎委員

- ・ 現代史資料編と通史編に限るといって、逆にいうと、概説と年表は載せないということか。年表を載せた方がよい気がする。

○谷本委員

- ・ 「新札幌市史」や「旭川市史」ではCD-ROMをつけた。年表はデータがあった方が使いやすい。もし売ることを優先するのであればCD-ROMをつけて売った方がよいのでは。

○山崎委員

- ・ 年表と概説の5000部を売るといえるのは、相当強気な数と思う。

○桑原編集長

- ・ 「北海道史年表」は、北海道出版企画センターに後から追加で刊行してもらって、それくらい売れたのではないか。

○靄原室長

- ・ それでもすぐ品切れになって、古書店でも高く販売するくらい売れた。そういうことがあったことから強気の数で出している。

○山崎委員

- ・ 年表はCD-ROMにしてつけるとか、有償はしないで全部ホームページに載せるとか、いくつか選択肢はあると思うのでもう1度ご検討願いたい。

○坂下副編集長

- ・ 年表の中身を引き出せるようにできたら非常によい。検索機能もついた方がよい。

○奥田委員

- ・ 最初はCD-ROM付きで本を売って、何年か後にホームページに載せてはどうか。将来にわたってすごく使われると思う。

○靄原室長

- ・ 案では、別途可能な範囲を検討するとしているので、その部分も検討に含めることとしたい。

(3) その他

ア. 道新記事データ（第1期分）の提供について

○靄原室長

- ・ 昭和20年1月から42年3月までの道新の記事データを選んで入力する作業がついに先日終わり、全部で44,000件余りあった。エクセルデータで各先生のお配りする。
- ・ キーワード検索の他に、分野別の見出しの検索ができるようにした。見たい記事は、一番左のNo.を指定していただければ、コピーやデータを送るし、見に来ていただいても構わない。
- ・ 現在は引き続き、縮刷版刊行後の42年4月から、道新データベースができる63年までの分を作業しており、今年度中に提供予定。

○坂下副編集長

- ・ 原本はどのように保管されているのか。

○靄原室長

- ・道新から購入したCD-ROMの中にマイクロフィルムからコピーしたものが入っており、別に紙に焼いたものも製本している。一覧で見るには製本をめくった方が便利。

イ. 追加委員について

○靄原室長

- ・前回の企画編集部会以降に委嘱された委員、あるいは手続中の委員の氏名をお知らせします。

ウ. その他

○桑原編集長

- ・その他は特にないようなので、これで令和元年度第1回企画編集部会を終わります。ありがとうございました。

(了)